# 西宮歴史調査団通信 2014年 4月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内 ＝ 662-0944 西宮市川添町 15-26 TEL0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

## 西宮歴史調査団活動開始!!

平成25年度の活動報告会も終わり、けが人もなく一年の活動を無事終えることが出来ました。橋梁班の調査活動など聞いていると、市内北部の山間部での調査が多くなっているようなので、「無事に終了した」というのは本当にホッといたします。

そして、今日からいよいよ平成26年度の活動が始まります。2008年に発足して以来、9年目に突入です。「市民が主体となって、市内に残る指定文化財には指定されていないが貴重な歴史資料を悉皆調査し、後世に残していこう!!」という、郷土資料館員の熱い熱い思いのもと発足したものの、最初の頃は「どんな調査が出来るかな?」「参加してくださる人はいるかな?」と不安もありました。しかし、私たちの思いに賛同してくださり、多くの皆さんが参加し、協力してくださっていることに、心より感謝しています。

## 西宮歴史調査団の役割は大きい!!

平成23年度に発刊した、西宮歴史調査団・調査報告書第1集『甲山八十八ヶ所』は大人気本で、昨年完売いたしました。発刊から2年でのことです。「まちたび博」でも甲山八十八ヶ所をめぐるツアーができるほど、注目を集めるきっかけとなったのです。また、平成24年度に発刊した、西宮歴史調査団・調査報告書第2集『西宮の地蔵』は、どんどんなくなっていってしまうお地蔵さんを記録できたことで、喜んでくださる方が多い本となりました。

本来、こういった調査報告書を作ろうと思うと、私たちだけでは調査だけで十数年かかります。それが、10年以内で刊行できたのは、西宮歴史調査団員として頑張って調査してくださった皆さんのおかげなのです。文化財を守るうえでも、私たち資料館員の力は大きいようで実際は小さいもので、市民の皆さん一人一人の力がとてもとても大きく、重要なのだと改めて感じます。

地道な作業が続くうえ、無理難題もいいますが、本年度も「後世の人々に喜ばれるように頑張ろう!」を合い言葉に一緒に調査してくださると嬉しいです。私も、忙しい時間を割いて協力くださっている皆さんに引っぱられながら、一生懸命頑張りたいと思います。

（細木）

# 西宮歴史調査団通信 2014年 5月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内 〒662-0944 西宮市川添町15-26 TEL0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

## 文化財調査ボランティア「西宮歴史調査団」

文化財調査ボランティア「西宮歴史調査団」（以下、西宮歴史調査団）は郷土資料館で実施してきた「郷土史学習会」を契機としています。郷土史学習会は、その名前の通り西宮の文化財について、座学や野外調査を実施してきた学習会です。この学習会を継続発展させ発足したのが、西宮歴史調査団です。

西宮歴史調査団の特徴は、①団員には市内の文化財を「実際に」調査してもらい、その調査を学芸員がサポートすること、②調査の成果はまとまり次第、報告書として刊行していることです。このことは、他のボランティアや友の会ではあまり例がなく画期的なことです。この背景には「地域の歴史は、その地域の人々が築き、つくりあげるもの」という考えがあるからです。郷土史の主役は歴史学者ではなくそこに住んでいる人々なのです。

歴史学やモノ学における調査の第一歩目は「資料調査と資料集成」です。歴史調査団では、現地調査による調査カードの作成や、古文書のノートへの書き出し作業などがこの第一歩目にあたります。この成果が蓄積されると西宮の石造物・橋梁・宗門帳のデータベースができあがります。このデータベースに基づき、個人の考えや独自の切り口で「実証的に」資料操作していくことが歴史研究につながります。

つまり、地味で時間がかかり、地道な作業ではありますが、資料調査や資料集成によるデータベースの作成が実は最も重要な作業であるということです。しかし、この地道な作業を通して、新たな発見や考え、歴史研究に対する独自の切り口を思いついたりすることがあります。このことが、他では味わえない「歴史」調査団の楽しさでもあります。

橋梁班調査風景

古文書班調査風景

石造物班調査風景

## 西宮の歴史・文化財遺産と西宮歴史調査団

◎『西宮歴史調査団年報　二〇〇六年度版』（一部抜粋）

「西宮歴史調査団」では、それら先行研究に導かれながら、市域の不動産的な歴史・文化遺産をすべて調査し記録する、という無謀とも思える事業に取り組むことになった。目標達成には時間がかかるであろうが、不可能ではない。四十七万市民が一人一点の資料を調査すれば、四十七万点の資料カードが生まれるのである。この「歴史調査団」が、市民自らの歴史を記述することの端緒となるよう努力していきたい。大方の支援を希望する。

（西宮市立郷土資料館）

# 西宮歴史調査団通信 2014年 6月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

## 石造物班からの報告

## 十日戎の前夜

今年は、午年。十日戎の前夜、えべっさんを背中に乗せて市中を巡回するといわれる神馬が西宮神社には三体あります。参道沿いの神馬舎から愛らしい顔を覗かせる神馬と拝殿前で今にも駆けだしそうな雄々しい二体の神馬。

社務所の方に尋ねると「拝殿前の神馬は明治三二年、白鷹酒造の初代辰馬悦叟氏が西宮の馬家として、西宮神社に神馬を奉納することを思い立ち、皇居前広場にある楠公銅像の馬像や上野公園の西郷隆盛銅像の犬（ツン）を代表作とし〝馬の後藤〟と言われる彫刻家、後藤貞行氏に制作を依頼。境内に鋳造所を設けての作業であったとか…。

神馬建立の翌年、和歌の宗家冷泉家当主が、

### 馳せいづるものとや神もみでて見む ふたつの馬（こま）のいさむすがたを

とこの銅像を賞賛して詠じた歌が手水舎の側の石碑に刻まれています。

また、名作だったため、戦時中の金属供出を免れます。まさに、「経済は道徳である。」を実践した人です。

明治の経済人の心意気を感じるために、辰馬考古資料館・禄水苑の白鷹集古館を一度訪ねてみて下さい。美味しいお酒も待っていますから。

※伊勢神宮・上賀茂神社・住吉大社などには、本物の神馬がいます。（原田　孝一）

と神馬にまつわる色々な話を伺うことができました。

辰馬悦叟氏は、拝殿前から神池に架かる〝瑞寶橋〟（2013年登録文化財に登録）を奉納した人でもあるんです。

辰馬悦叟氏は、富岡鉄斎との交流、考古学への関心など文化人としても有名であり、富岡鉄斎は、悦叟氏の墓碑銘の中で、「人は酒の美きことを称するも我は君が誠を称す。」とその人となりを称していたんですよ。」

編集・衣笠周司（古文書班）

# 西宮歴史調査団通信 2014年 7月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

## 古文書班からの報告

### 守屋新兵衛と鎌田三伯

宗門帳は有力者順で始まっている。文久三（1863）年法花宗の筆頭は「尼ヶ崎養寿寺旦那守屋新兵衛年二十八」であり、禅宗の筆頭は「当所順心寺旦那医師鎌田三伯年四十三」と記されている。

掛け持ちしている石造物班では西宮神社の石造物を調査している。石造物を寄進できるのは然るべき人で、文化八（1811）年に寄進された用水槽に守屋新兵衛の名が世話人として刻まれているが、マイナス24歳になり、年齢的に適わない。通称は襲名されることが多いので父親か祖父であろう。

今調査している赤門前の天保七（1836）年建立の巨大なツインタワーには200名余載っている。ここにも守屋新兵衛がおり、鎌田三伯もいる。

鎌田三伯については三月に郷土資料館で開催された古西義麿氏の「原老柳はどこでなくなかったか」の講演では一番弟子として紹介されている。

原老柳が死去した安政元(1854)年は三伯は34歳になるが、灯籠寄進時は僅か16歳である。本人なのか又は鎌田家が代々苗字を許された医者の家系なのか？

早く天保七年の宗門帳を見てみたい。

★…荒木　知

### 神戸市立博物館の場合 2

（「西宮歴史調査団通信」2014年2月号より続く）

学習支援交流員（以下、交流員）制度は二〇〇八年に発足、その翌年に登録したのが、私を含む第二期生でした。といっても第一期からの継続者は皆無で、正式な引継ぎもなかったのですが、まず、彼らが残した「旧居留地マップ」を改訂、同年末には業者へ発注、年度末までに新たな教材ツールを一つ制作する事が、初年度の企画目標として与えられました。

日常的な事務補助と共に、博物館側が要請した企画活動（通称：ミュージアムツールボックス）は、当館展示の特色（旧外国人居留地・国宝指定銅鐸および銅戈・南蛮美術・古地図コレクション）に合う教育普及プログラム（代表的な所蔵品に因んだ作業や市民との対話を重視する、来館児童・生徒向けの体験型学習）を、学芸課監修のもと交流員有志によって開発し、将来的に交流員自ら（学芸員主催とは別に）ワークショップ運営にあたる…というもので、既存分と合わせ五事業の実施まで以後三年間、数名の第二期生が実質的にその基礎を創ることになったのです。

（次回の古文書班担当号に続く）

★…横山　忠範

編集・衣笠周司（古文書班）

# 西宮歴史調査団通信 2014年 8月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

## 岡本家文書の世界　全点を展示

俵谷　和子

「岡本家文書を全点展示する」気がつけば、そういうことになっていました。

だいたい五年間ぐらい先まで特別展示のテーマや担当などを決めて館の運営をしているのですが、今回のテーマはいつごろどのようにして決まったのか、もう覚えていない状態です。たぶん、民俗系の展示が続いたので異なるテーマの展示をしようということになったと思います。ただ私は近世文書の専門家ではないため、今回は文化財として貴重な「古文書」を紹介する展示にすることにしました。

岡本家文書は、西宮が全国に誇れる近世文書です。その評価が高いことは、十分承知しているのですが、その膨大さに圧倒されてこれまでなかなか紹介できなかった資料です。

震災で全壊する前の岡本家主屋

古文書の入っている茶箱

先日の衛藤さんの講習会でもあったように、せまい意味での古文書は中世までのもので、江戸時代の文字資料は含まれていません。また、全国に大量に残されている近世文書の研究そのものが戦後以降に始まっており、体系的な史料研究は未熟です。分類や目録も研究者・担当者によって一定しておらず、整理方法も議論されているような状態です。

今は、古文書が発見された場所や状況、収納されていた状態までも記録していく「現状記録」を行いますが、『西宮市史』が編纂された昭和30年代では、そのようなことは行われず、内容重視で整理作業が行われてきました。そのため岡本家文書がどこでどのように収納されていたか、収納されていた68合の箱はどのような形状だったかといった情報は残されていません。

近代の史料がつまっていた村用箪笥

そのような岡本家文書をどのように紹介するべきか、悩んだ結果が「全点を展示する」でした。「本当に展示室に全部並ぶのか」という疑問の声（自分の声も入っています）と格闘しつつ、展示室に資料がならびきったころには、本当に文書たちがかわいくて仕方がありませんでした。

これまで、敬遠してきたこの文書に光を当て続けよう、そんな思いを新たにしました。

みなさん、岡本家文書をじっくりみてください。そして、このかけがえのない財産をこれから先100年、200年後の人たちにもその価値が伝わるよう一緒に励んでいきましょう。

**特別展示「西宮の古文書―岡本家文書の世界―」は8月31日まで**

編集・衣笠周司（古文書班）

# 西宮歴史調査団通信 2014年 9月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

## 昔の太多田川を垣間見る

倉田克彦（橋梁班）

湯山古道の橋の先(矢印)に清水が湧いている=写真下 (Photo=Kinugasa)

### 【1】地誌と地図の違い

「船坂村地誌」によれば、大阪への県道三等に属する椴木橋と清水橋、西宮へ通じる里道壱等に属する戎橋が橋ヶ谷川に架かっていた。ところが今の地図には、どの橋も橋ヶ谷川も見当たらない。この橋と地区の伝承について、地元の坂田芳郎さん、樽井正雄さんに聞いた。

### 【2】「ハシガタ」は橋ヶ谷川

太多田川の上流部（船坂地区）を昔は「ハシガタ」と呼んでいて、「ハシガタへゴミを捨てに行く」などと言っていた。「ハシガタ」は橋の傍らということかもしれないが、よく判らないとのことだった。バス停留所「舟坂東口」付近から上流側を橋ヶ谷川、下流側を太多田川と呼んでいたという。

### 【3】県道三等はどこ

昔の有馬街道は、生瀬からバス停「舟坂東口」辺りまで「四十八ヶ瀬」と言われた太多田川の瀬伝いの道とは言えない道だった。集落に近い「舟坂東口」辺りで岸に上がり、そこに湧く清水で一息入れて、橋を渡り有馬街道（湯山古道）の旅を続けたようである。

明治時代に造られた生瀬からの道路は「舟坂東口」付近で太多田川を渡って集落の中へ入り、湯山古道、次いで太多田川沿いの古くからの道に繋がり、船坂の中心地区へ向かう。これが当時の大阪への県道三等であろうと推定した。

上は椴木橋＝舟坂東口のバス停が左端に
下が清水橋か　(Photo=Kinugasa)

### 【4】橋は何処に　ー謎解きー

橋ヶ谷川と県道三等が決まれば謎は解けて、太多田川を渡った辺りが「字椴木」で、そこに架かる橋が「椴木橋」。それに続く西へ伸びる道が、今の県道82号・大沢西宮線に遮られる所に「清水橋」。県道82号が市道・山99号と合わさる所に「戎橋」。市道・山99号とそれに続く県道82号が里道壱等（西宮往還）である。

### 【5】伝承

西宮往還の南側の山に湧く泉はフッ素が多く、「なすび歯」という話が遺されている。余談だが、「船坂の茄子」はその味で評判だったそうだ。

生瀬にある赤子谷という地名は、今に伝わる悲しい物語に由来する。その伝承の内容が、生瀬と船坂では違っている。赤子谷川が太多田川に注ぐ近くに祠があり、それが物語に関係するのか、しないのか。何故そこにあるのか。伝承とは全く関係ないとも聞いた。はてさて、疑問が残りました。

赤子谷にある祠 (Photo=Kurata)

編集・衣笠周司（古文書班）

# 西宮歴史調査団通信 2014年10月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

## 道（未知）との遭遇

荒木　知（石造物班）

わが家の隣に「甲東村道路元標」がある。道路元標は、耐久性のある石材で縦横25㎝平方・高さ55㎝で上部先端5㎝のアールで作った路線の起・終点を表す標識で、大正八年（一九一九年）道路法施行令により、国が各市町村に設置を義務付けた。

現西宮市には9町村あったが、元標が現存しているのは甲東、瓦木、芝、山口だけである。当時の甲東村村長が元門戸村庄屋家であったため、ここに設置されたようだ。

交通事故に遭い、二つに折れ、川に放置されていたのを甲東文化財保存会の手で修復され元の位置に戻されたが、今度はゴミステーションの基地となっているのは嘆かわしい。

ゴミステーションと化した甲東村道路元標

山口村道路元標

芝村道路元標

瓦木村道路元標

纏向村道路元標

一宮村道路元標

昨年、西国街道歩きで尼崎市西昆陽の「師直塚」の近くで武庫郡武庫村と伊丹市昆陽で川辺郡稲野村のを見たが、今年は1月に六甲越の有馬温泉の金の湯前で、有馬町の元標を見つけた。

「金の湯」前で見つけた有馬町道路元標

惠方詣りに参拝した三河一の宮・砥鹿神社には宝飯郡一宮村のがあり、2月11日、天下の奇祭「お綱祭」でJR桜井線巻向駅前に磯城郡纏向村のが、3月は奈良市の月ヶ瀬梅林入口で添上郡月瀬村のが、9月には丹波市柏原の観光協会向いに氷上郡柏原町のがあった。

遍路巡礼は目的をもったスタンプラリーだが、道路元標は道（未知）との遭遇です。

柏原町道路元標

月瀬村道路元標

編集・衣笠周司（古文書班）

# 西宮歴史調査団通信 2014年 11月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

## 指定文化財の公開展　ことしは「古墳」

文化庁では11月1日～7日までの1週間を「文化財保護強調週間」としています。この期間には全国各地の博物館や文化財保護行政に携わる部局などが、市民に文化財を親しんでもらうことを目的として、様々な行事を行っています。

西宮市では、例年この期間に「指定文化財公開展」を実施しており、市内の文化財を紹介しています。

今日、西宮市指定史跡は5件あり、上ヶ原用水路を除いて4件が古墳です。今回はこの4基の古墳をとりあげて、「平成26年度指定文化財公開展　西宮市指定史跡～古墳～」をテーマに、関連資料を展示しています。西宮市に指定されている古墳は、指定順に五ヶ山古墳群第2号墳（仁川町六丁目）・関西学院構内古墳（上ヶ原一番町）・青石古墳（山口町下山口）が昭和49年に指定され、老松古墳（苦楽園六番町）が昭和56年に指定されました。

これらの古墳は6世紀後半頃から7世紀にかけて築造された古墳で、西宮市の古墳築造の状況や、古墳分布の特徴をよくあらわしています。

五ヶ山古墳群第２号墳

関西学院構内古墳

## 特徴を誇る古墳群

西宮市域では、上ヶ原一帯で、6世紀後半頃から7世紀頃にかけて、上ヶ原古墳群が形成され、同じ頃、六甲山南麓の芦屋～苦楽園周辺で八十塚古墳群が形成されます。また、7世紀中頃には宝塚市域と重複する仁川丘陵で五ヶ山古墳群が形成され、古墳の築造が終息にむかいます。

これらの古墳群は、それぞれ石室の構造や出土遺物、立地状況などに特徴があり、西宮市が他の地域に誇れる文化財の一つでもあります。

今回の展示と関連事業でもある古墳見学会を通じて、古墳の出土遺物だけでなく、古墳の立地や、石室の構造などを体感いただけたら幸いです。

また、歴史調査団でとり上げている未指定の歴史資料も、指定文化財と同様に西宮市の郷土の誇りとなる文化財であることを再確認くだされば幸いです。

森下　真企

←青石古墳

←老松古墳

編集・衣笠周司（古文書班）

# 西宮歴史調査団通信 2014年 12月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

## 古文書班のひろば

### 女性の名前は仮名書き

江戸時代の女性の名前は仮名書きで、それに「御」「お」を付けて呼んでいたそうです。例えば「きみ」は「おきみ」さん、「ゑい」は「おゑい」さんと。

そう言えば、時代劇や小説の中では「お」を付けて呼んでいます。西宮町の宗門帳でも、女性の名前は稀に、例えば八重のように漢字表記もありますが、ほとんどが仮名書きで、漢字をくずした変体仮名と言われているものです。

同じ音の変体仮名は幾つかあって、例えば「ま」の場合は漢字で表すと「万」、「満」、「末」、「萬」、「麻」、その他にも幾つかあります。

例に挙げた座古屋小八の娘、右から三人目の「くま」は「満」が使われています。名前の表記の理由を詮索しても始まりませんが、「くま」の「ま」が何故「万」ではなくて「満」なのでしょうか。

★…倉田　克彦

### くずし字の80年

わが家に「くずし字一萬語手本」という480ページの本があります＝写真。新書判くらいの大きさですが、全ページが茶色に変色していて、触れると崩れそうです。

それもそのはず「昭和九年九月一日発行・婦人倶楽部九月号附録」となっていますから、80年も前に発行されたものなのです。

この本は「手紙用語、日用語」の手本で「習字用のお手本としても立派にお役に立つもの」と序文でうたっています。

つまり。これは「くずし字」を当たり前に使っていた当時のごく普通の婦人が対象なのです。だから「辞書」ではなく、あくまで「手本」というわけです。

私がいま使っているのは「くずし字解読辞典」です。平成25年発売で、序文によると「主眼は特に大学の史学科において古文書や近世文書解読実習を行う際に役立たせること」なのだそうです。

ですからこの本は、書名のとおり「解読」するための「辞典」で、研究者が対象となるのでしょう。

同じ「くずし字」なのですが、80年の間にこんなにも変化してしまったのです。

古文書班で解読に苦しんでいる身にとっては、すらすら読み下していた当時のご婦人が、うらやましいかぎりです。

もしかして、あと80年も経てば、私が使っている文字も言葉も、通じにくくなってしまうのでしょうか。

★…衣笠　周司

### 神戸市立博物館の場合 3

◆「西宮歴史調査団通信」2014年7月号より続く

交流員の発足以前から、当館ワークショップ事業には、市内桜ヶ丘遺跡出土の絵画銅鐸（国宝）と、南蛮美術「聖フランシスコ・ザヴィエル像」に関するものがあり、既に学芸員や指導主事の下で随時行われていました。この二つの運営を継承し、それらも参考にしながら、先に挙げた四大特色に即して各種一つは揃うよう、新たな事業を企画・制作・実施するまでが、第二期生の主要活動における長期目標とされました。

第一期生が着手していた「旧居留地マップ」は、明治時代に外国人居留地のあった当館周辺地域を巡る、小・中学生とその保護者向けイベント「居留地ウォーク」に使用する、いわば携帯型の教材で、ボランティアガイドとなる交流員にとっての台本です。大きさは六つ折りでパンフレット程度、横へ開くと史跡・名所や時代背景の説明、全て広げると裏面が各地点を示す略図、両面カラー図版。二〇〇九年七～九月の毎週、前期生による試作品を基に協議、可能な限りそれも尊重しつつ、改良に努めた結果でした。

（次回の古文書班担当号に続く）

★…横山　忠範

編集・衣笠周司（古文書班）

# 西宮歴史調査団通信 2015年 1月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298.FAX 0798-33-1799

## ♫ 橋の三重奏 ♪

### 道路橋・人道橋・鉄道橋

武庫川の支流のひとつに名塩川があります。名塩川と武庫川が合流する直前のところに、清瀬台に向かって伸びる木ノ元大橋があります。この橋は武庫川に架かるかと思わせるほど大きな橋です。

しかし、名塩川は、川幅数メートル足らずです。名塩川を川上に向かって小さな橋をふたつやり過ごし、更に谷間を流れる川に沿って坂を上っていくと、目の前に複数のビルが現れ、それらを繋ぐ何本もの道路が上下に輻輳しています。そして北西の片隅にトンネルに差し込むようにJR西宮名塩駅のプラットホームがあります。

ここに先程の木ノ元大橋に負けないぐらいの長大な名塩新橋（写真①）が北側最上部に延び、名塩川の谷間を繋いでいます。そして、南側には駅周辺の駐車場を結ぶ道路橋が上下にふたつ架かり（写真②）、中央部には駅につながる人道橋（写真③）、そして片隅にJR西日本の鉄道橋があります。この狭い空間に3種類の橋が五つも架かっています（写真④）。

「何故この様な複雑な構造にして、数多くの橋を造る必要があったのかな？」と思いながら名塩川の上流へ向った秋の午後でした。

（橋梁班）

文・写真・編集＝高橋博己

写真①　名塩新橋

写真④ 名塩新橋の下方にプラットホーム

写真③ 人道橋

写真② 上下に道路橋

# 西宮歴史調査団通信 2015年 2月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内 ＝ 662-0944 西宮市川添町 15-26 TEL0798-33-1298.FAX 0798-33-1799


## 調査団の調査を活かした特集展示「西宮地域の宗旨人別帳」案内

郷土資料館では特集展示「西宮地域の宗旨人別帳」を開催しています。前期（二月二十二日まで）は、上瓦林村の宗旨人別帳を展示しています。

旧上瓦林村には、十七世紀中頃から十九世紀幕末までの宗旨人別帳が残されており、万治二年（一六五九）の帳面は西宮市内で最も古いものです。村の家族の百年以上に渡る変遷が分かる好史料です。二月二十三日から三月二十二日の後期は、西宮町の宗旨人別帳を展示します。人口の多かった旧西宮町には、約四百五十点の宗旨人別帳が残されています。これらの宗旨人別帳を古文書班が調査中です。後期では、古文書班の活動をもとに、主に幕末の宗旨人別帳を紹介します。村と町の違い、時代による違いなどを見ていただきたいと思いますので、ぜひ、前期後期を通してご覧ください。

（古文書班担当　衛藤彩子）

上瓦林村宗旨人別帳（万治二年）

西宮町宗旨人別帳（一部）

# 西宮歴史調査団通信 2015年 3月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 TEL0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

## 力こもった発表 熱心な聴衆

橋梁班　小西さん

古文書班　南さん

古文書班　高谷さん

石造物班　粟野さん

## 歴史・訪ね・歩き@にしきた

### ～西宮歴史調査団の成果～

西宮歴史調査団は3月26日に西宮北口図書館で「歴史・訪ね・歩き@にしきた」のタイトルで日頃の成果の発表を行った。

この日は50人近い聴衆が集まり、熱心に聞き入る姿が目立った。

発表は3班が順番に行った。橋梁班は小西貞一郎さん、古文書班は南好廣さん

西宮北口図書館で開催

と高谷康彦さん、石造物班は粟野光一さんが担当し、パソコンで映像を示しながら力のこもった報告となった。

終了後も熱心な参加者が個別に報告者に質問する姿があちこちで見受けられた。

会場に展示された「西宮歴史調査団通信」に見入る人たちもあり、こちらも好評だった。

編集・衣笠周司（橋梁班）